

育成を目指す資質・能力をはぐくむ授業づくりのポイント 28

児童生徒が分かる喜びとともに学ぶ意義や楽しさを実感しながら、主体的に学び、教師が付けたい力をはぐくむ授業を実践するためのポイントをまとめました。自己の授業を振り返り、授業改善の参考にしてください。1～28の項目は各時間で必要なところを選択してください。

		授業づくりのポイント	主体的・対話的で深い学びの視点			
事前	1	☐ 児童生徒の実態やこれまでの学習の状況をつかむ。	主体的な学び	対話的な学び	深い学び	子供の姿 実現したい
	2	☐ 単元のゴール(目標を達成した児童生徒の姿)を明確にし、単元構想を考える。				
	3	☐ 育成を目指す資質・能力をはぐくむため、指導と評価の計画を立てる。				
	4	☐ 指導に効果的な教材・教具やICTの活用場面を考え、準備する。				
導入	5	☐ 前時までの振り返りをし、これまでの学びを確認させる。				見通しを持つ
	6	☐ 学習課題を設定し、生活と関連させたり、既習事項と比較させたりする。				自分と結び付ける
	7	☐ めあてを児童生徒とともに確認し、授業時間中、黒板等に提示しておく。				見通しを持つ
	8	☐ 課題解決の見通しを持たせ、学習に主体的に取り組めるようにする。				見通しを持つ
展開	9	☐ 実物や具体物を使用して、見て触れて学べる体験的な活動を取り入れる。				興味や関心を高める
	10	☐ 自力解決の時間を設ける。				自分の考えを形成する
	11	☐ 児童生徒の反応を予想し、つまづきに対する手立てを準備する。				粘り強く取り組む
	12	☐ ペアやグループで考えを共有したり、議論したりする時間を設ける。				共に考えを創り上げる
	13	☐ 友達の考えを認めたり、考えに共感したりする雰囲気大切に作る。				互いの考えを比較する
	14	☐ 自分の考えを伝えようとする意欲を持たせ、工夫して伝えさせる。				多様な手段で説明する
	15	☐ 友達の考えについて、質問をし、考えを深める場面を設定する。				協働して課題解決する 思考して問い続ける
	16	☐ 考えをゆさぶる発問や多様な考えを引き出す発問などねらいに迫れる発問を行う。				新たなものを創り上げる
	17	☐ 学習のポイントを確認する。(ねらいに沿ったまとめになっているか留意が必要)				知識や技能を概念化する
	18	☐ どんなことを学習したのかがわかるように板書する。(児童生徒の振り返りに生かす。)				知識や技能を概念化する
	19	☐ 適用題に取り組ませ、分かっているか、できるかを確認する場面を設ける。				知識・技能を習得する
	20	☐ 個別最適な学びが可能となるように適用題を工夫する。				知識・技能を習得する
	21	☐ 児童生徒の学習状況を把握し、必要に応じて支援を行う。(指導に生かす評価)				知識・技能を習得する
まとめ	22	☐ 振り返りを行い、言葉で書かせたり、発表させたりする。				振り返って次へつなげる
	23	☐ 振り返りでは、学んだこと、学び方、めあての達成状況、次時への意欲等を書かせる。				振り返って次へつなげる
	24	☐ 本時の学習の家庭学習への生かし方を助言する。				知識・技能を活用する
	25	☐ 次時の予告を行い、意欲を持たせたり、家庭学習につなげさせたりする。				知識・技能を活用する
	26	☐ 振り返りまでを時間内に実施できるようにする。指導内容を積み残さない。				
事後	27	☐ 必要に応じて、評価を残す。(記録に残す評価)	主体的・対話的で深い学びの視点は、NITS「実現したい子供の姿」ピクトグラムより関連の強いものを示しています。			
	28	☐ 評価を次時以降の授業や家庭学習等に生かす。				

参考資料：京都府総合教育センター『学習指導案ハンドブック』（令和3年3月）

学力向上に向けた校内研修について ～授業研究会のススメ～

どの学校も児童生徒の学力向上のために授業研究会を実施されていることと思います。授業研究会を通して、すべての教員が授業改善の手がかりを得ることが大切です。そこで、管内の効果的な授業研究会の実践例を紹介します。

授業づくりの
ポイント 28



①事前研究をじっくり

事前研をもち、授業者とともにねらいを達成するための授業についてじっくり議論する。授業を自分事として捉えることができ、自分の学びにつながる。

②子どもの姿をじっくり

授業中に、担当を決めて子どもの学びや変容を観察することで、学習活動や形態、手立てがねらいを達成できるものになっていたかを検証する。

③学びを学校全体で共有

授業研究会で学んだことを今後の授業に生かす。研究主任等が学校全体で取り組みたいことをまとめ、発信することで、全教職員で共有して実践することができる。